

# 法人、地域をつなぐ地域食堂

神奈川県横浜市旭区下川井町 360 番地  
特別養護老人ホームさくら苑  
施設長 奥野 天元

## 1. はじめに

当施設が所在する横浜市旭区は、人口総数は市内 5 位だが、65 歳以上の高齢者人口は横浜市のなかで最も多く市内第 1 位であり高齢化率も第 2 位と年々高くなっている。また、全世帯のうち単独世帯が約 3 割で横浜市第 1 位、夫婦のみの世帯が約 2 割となっており、今後増加の見込みとなっている。

このような独居高齢者に対して、「共食機会の提供」をすることにより、低栄養予防と心理的健康度向上の取り組みを実施検討した所、高齢者だけではなく、核家族化や共働き世代の「団らんの場」の減少も共に解決すべき課題であると気づき、孫子老(まごころう ※真心とかけています)の三世代交流の場として地域住民の集う「地域食堂」を地域連携の場と位置づけ開催する運びとなった。

## 2. 事例紹介

地域食堂運営組織を構成するにあたり、当施設が中心となり旭区の医療法人、社会福祉法人、地域で活動するボランティアに声をかけ病院、老人福祉施設、地域ケアプラザ、地域住民、地域企業が協働運営する形態を構築した。各施設より各管理者をはじめ、管理栄養士、生活相談員、介護職員、医療連携室職員が連携し、地域食堂を運営する事で異業種間交流に繋がり、地域を支える医療や福祉の専門家達が集う場となった事は、顔の見える連携となり組織を超えた繋がりを作る事ができた。

また、地域食堂開催にあたり地域住民の趣味や特技を生かしたワークショップを同時開催する事で、社会資源発掘となり活躍の場を提供する事で新しい出会いから、さらなる活動の範囲を広げる手助けとなった事も地域食堂の意外な功績の一つとなった。

多世代が集い共に食事をする中で、地域食堂を運営する側も参加する側も学びの多い場となり、単発開催を計画していたが、現在では定期開催を望む声を受け年に 3 回継続開催する事となった。

## 3. 考察

家庭における共食が難しい高齢者や子供に共食の機会を提供する交流の場作りとして発足した地域食堂であったが、健康増進や食育推進だけではなく運営する側の地域連携にも繋がり閉鎖的な専門施設が隔たり無く協働する事で、専門的情報共有や他社協力に繋がった。

また、地元企業や運営組織とつながりのある企業が協力を申し出るなど連携の輪が広がり、今後更なる地域連携が見込める。地域住民との交流においては、日頃老人福祉施設内や病院内にて働く専門職と地域住民が未病の段階で出会い交流をすることで、日頃抱える不安や困りごとに早期に手を差し伸べ、各専門機関へ繋ぐ役割を担う可能性も広がった。何より、地域住民に団らんの場となる供食の機会を提供できたことへの反響が大きく、回を重ねるごとに参加人数が増加傾向にあり、地域住民の「集う事」への需要を感じた。

#### **4. おわりに**

まだ課題も多い地域食堂運営ですが、常に「楽しさ」を忘れず開催したいと思っています。開催側、参加側ともに「楽しく過ごしていたら、結果として情報交換や連携が取れていた。」という状況になるのを理想と考え、今まで参加していない法人にも声を掛け、取り組みを継続します。